



この人に訊く

いが一つになっていないと感じられ、とても残念だと思っています。「放射能は大丈夫です」という単純な見解、そう断言する方向性をおかしいと感じれば、やはり話し合うべきだと思うんです。

なぜこのような活動を続けてきたのかといえば、「原発事故は仕方なかったことだ」とするのではなく、「なかったことにするわけにいかない」という思いからなんです。10万人以上の人たちが家を離れて帰れないという状況にあることを、同じ県民として考えなければならぬ。会津という離れた土地にいる自分たちの、痛みの度合いや被害の大きさは違うかもしれ

ど小さい。だったら何も言わず、黙ってしまおう」というふうになつてしまいます。それは、「3・11」以降を生き延びている大人として無責任なことだと思っんです。ですから、「原発事故を二度と繰り返さない」、「誰の命も大切に」、「命こそ宝」という社会を、ここから作り出していきたいと思っっているんです。このセンターには県内の自主避難者がよく集まります。何とか会津で子どもたちを育てていこうという方たちが、運動着の線量を測つてみてキロ当たり20〜30ベクレルの数値が出たのを知ると、より遠くへ移住してしま

会津放射能情報センター

代表

片岡輝美さん

②

県内で子育てするのを楽しみにして、自宅を建てたりマンションを買ったりしてがんばろうという時、「やっぱり無理」とさらに避難して行ってしまう。それこそ福島県にとつて大きな人口流出、貴重な存在を失ってしまうことは間違いないのに、私たちはそういう人たちをここから見送るだけなんです。

その一方で会津に留まってい



片岡 会津は安全だと言われ、観光や農業で復興していかねければならないとは私も十分わかっています。私も会津の生まれ育ちです。すから、この土地が好きだし、人のつながりが好きだし、お米なんて他と比べものにならないほど美味しいとわかっています。でもやはり、それにもかかわらず「3・11」以降の行政の進め方を見てみると、みんなの思

れないけれども、「3・11」以前と現在の私たちの生活が大きく違つてしまったことには変わりありません。痛み比べをするということは、自分に起こつたことを仕方のないことだと胸の奥にしまい込むことになつてしまいます。なぜなら、「中通りや浜通りの方たちがこんなに苦労をしているのに、会津にいる私たちは同じ仕事を続け、食べ物もまあまあ安全というのですから、自分たちの痛みなんて比べものにならないほ

る人も多いし、「会津だから何とか生きていける」と思っている人もいます。そういういろんな立場の方たちが、このセンターに顔を出してください。そういう方たちのために、食品測定器やガイガーカウンターを貸し出ししたりしているわけです。

(つづく)